

# 「鉄道」から読み直す宮沢賢治

平成23年9月24日(土)  
宮沢賢治記念館ホール

宮沢賢治が「鉄ちゃん」、つまり鉄道ファンだったと言ったら、どう思われるだろう。「銀河鉄道の夜」や「シグナルとシグナレス」を書いた賢治が鉄道ファンなのはあたりまえだ。そう思われるかもしれない。では、教え子の就職依頼のための旅だと言われたり、亡妹トシの魂を追う旅だと言われる樺太旅行が、実は鉄道ファン心理を満足させるための旅だったと言われたらどうだろう。なにも教え子やトシに対する賢治の思いにケチをつける気はないのだが、賢治が樺太に旅立つ大正12年7月というのは、宗谷本線が稚内まで開業して半年後、稚泊鉄道連絡航路の就航後2ヶ月めにあたっている。あまりにもタイミングがよすぎると思う。

他にも賢治がファン心理から「初乗り」を急いだと思われる例がたくさんある。例えば、大正14年1月に、賢治は三陸に向かったが、前年の11月には八ノ戸線が開業している。また、大正14年9月に賢治は入営中の弟・清六を訪ねて青森県の山田野に赴いたが、五所川原線(現・五能線)の陸奥森田～鱒ヶ沢間が大正14年5月に開業したすぐ後だ。大正14年秋に、賢治は岩手県農業教育研究会に出席するために千厩まで行ったが、大船渡線の一関～摺沢間は、大正14年7月に開業している。年譜によれば、賢治が農業教育研究会に出席したのは、この一回だけのようなので、これも初乗りのための旅ではないかと思う。ただの偶然かもしれないが、これだけ偶然が続けば、賢治はいろいろと理由をつけながら、初乗りの機会をつねに狙っていたのだと言うべきではないだろうか。

東北本線は、賢治が生まれた頃には既に開業していたが、岩手にはまだ支線がなかった。岩手軽便鉄道、花巻電気軌道、東横黒線、橋場線、花輪線、山田線、八ノ戸線…これらは全て賢治の青春時代である大正時代に生まれている。賢治は、今よりも鉄道の占める位置がずっと高かった時代に、岩手に鉄道網が広がっていくのを目の当たりにしており、工事現場にまで足を運んでいた。賢治が鉄道ファンになったのも当然だったのではないだろうか。

しかし、ただ賢治が鉄道ファンだったというだけでは、鉄道が賢治に及ぼしたものの全貌は見えてこない。鉄道は単に旅行を簡便化するだけの道具ではなく、賢治をはじめとする多くの人々に世界観の変容を迫るような文化的な事件だったからである。

ハイネは鉄道の開業により「時間と空間という基本概念すら当てにならなくなった」とし、「すべての地方の山や森が、パリに押し寄せてくるような気がする」と書いた。大げさな記述に思えるかもしれないが、かつて何日もかかって赴いた場所に、数時間で行き着いてしまうということは、鋭敏な感性の持ち主には、時空間が歪むように感じられたのだろう。こうした感覚が、賢治においてはイーハトーブからベーリングに向かう列車(「氷河鼠の毛皮」)を生み、また、銀河を駆け抜け、生と死の世界をも走りぬける鉄道(「銀河鉄道の夜」)を生む想像力に繋がったのではないかと思うのである。

居ながらにして窓外に景色が流れていくということも、初めて鉄道を体験する人にとっては、衝撃的な出来事だったようだ。プルーストは、汽車の窓外に流れる景色を書き留めようと、一生懸命にペンを走らせたことがあったのだというが、賢治も「岩手軽便鉄道の一月」や「第四梯形」等で同じことを試みている。もしかしたら、この移りゆく景色を書き留めるという方法が、歩きながら心象をスケッチするという賢治の詩作方法を生んだのかもしれない。いや、移りゆく心象をスケッチしようという試み自体が、窓外の移りゆく景色をスケッチすることから思いつかれたのかもしれない。

列車の中、というのも当時の人々に、新しい体験をもたらしたようだ。夏目漱石の「三四郎」は、同じ列車に乗り合わせたただの人との会話からスタートするが、小さな空間に見知らぬ同士が詰め込まれれば、会話をするのは当然だという、あの時代ならではの常識が前提となっている。志賀直哉の「網走まで」や江戸川乱歩の「押絵と旅する男」はもちろん、賢治の「化物丁場」や「氷河鼠の毛皮」、「銀河鉄道の夜」も、この常識があったからこそ物語が成り立っているのである。

初めてケータイやインターネットに触れた時、これからはあれもできる、これもできると、わくわくした気持ちになったものだが、賢治が岩手に広がりゆく鉄道を目にした時の気持ちも、これに似ていたと思う。いつ、どこで、どんな事件があったかということなら、手近にある本を見ればすぐにわかる。しかし、人々がどんな気分で生きていたかということになると、なかなかわからない。広がりゆく鉄道網にわくわくしていた賢治の気分を想像しながら作品を読み直してみると、今までとは違ったイメージが湧いてくるのではないだろうか。

(参考) W・シヴュルブシュ『鉄道旅行の歴史』法政大学出版局